# エレウシスの秘儀

西郷　田美子

## はじめに

遠い昔、まだそこには科学的な厳密な知識はなく、人々にとって不可解な出来事は神や精霊など「見えない力」によるものであると理解されていた。そして彼らは彼らの生活や生死を司るそれらに祈りを捧げ、祭りを行った。

科学が発達すると、祭りの形や意義は変わっていった。今現在行われている祭りは多岐にわたり様々であるが、生活や生と死について祈り、願うというものとは意味合いが違う。しかし、そんな祭りに触れると、自分は古代に祭りを行ってきた人々と確かにつながっていることを実感するのだ。私は古代の祭りについて知ることで、その当時の人の思想や生活、死生観を知り、そこからその人たちと確かにつながっている今の自分について知りたいと思う。

私は昔から星座としてなじみが深いギリシャ神話に興味があった。そこで古代ギリシャで行われ、その秘密性が私の興味を惹きつける「エレウシスの秘儀」について調べていくことにした。

エレウシスの秘儀式は穀物の女神デメテルとその娘コレーをまつり、古代ギリシャのエレウシスの地で行われた秘儀式である。ほとんどのギリシャ人が加入していたといわれるほど多くの人が参加したこの秘儀は、デメテル讃歌成立期からTheodosius帝によるこの儀式の禁止、ゴート人

による聖域の破壊までの約一〇〇〇年ものあいだ厳密にその秘密性が守られ、未だに謎のままである。キリスト教徒のみが秘密を暴こうとし、私たちに数少ない貴重な手がかりを与えた（注1）。

私がこの論文で考えていきたいのはそのエレウシスの秘儀における「秘密」、そこで伝えられたものについてである。何故長きにわたり、多くの人がその秘密を厳守したのか。その秘密とは一体何であったのか。

## 第一章　デメテル讃歌

まず、秘儀の基盤となる『ホメロス風デメテル讃歌』について考察を加えていきたい。私はこの『デメテル讃歌』でエレウシスの秘儀における信仰の基盤となり、秘儀を説明する神話を読み解き、そこに穀物のサイクルを体現するコレーの運命、人間の不死の否定、神になることへの否定、そして現世利益の約束を見た。穀物の女神デメテルとその娘コレーの神話を物語る『デメテル讃歌』は、デメテル自身による秘儀の伝授と創始も語り、エレウシスの秘儀を解明する最古の資料となっている。その内容にアテナイへの言及がないことから、成立年代はエレウシスがアテナイの支配下に入り秘儀がアテナイの管理下におかれる以前のB.C7C頃だと推測され（注2）、作者については明らかではないが、エレウシスにゆかりの深く自らも秘儀に参加していた人物ではないかと推測されている（注3）。

### 〈概　略〉

母デメテルのもとを離れ、野原で遊んでいたペルセポネは、父神ゼウスの企みでデメテルと父も母も同じくする神、ハデスによって連れ去られる。連れ去られる娘の叫び声を聞いた母神デメテルは娘神を探し彷徨（さまよ）い歩く。一〇日目にヘカテがデメテルのもとを訪れ、ペルセポネが何者かに連れ去られた旨を伝える。デメテルはヘリオスのもとを訪れ、娘神を連れ去ったのはゼウスの許しを得たハデスだということを知る。

ゼウスや神々に腹を立てたデメテルは神々のもとを離れ、人に姿をやつして人間の住む街や畑を巡り歩く。放浪の末に辿り着いたエレウシスの地でデメテルは、ケレオスの館で生れたばかりの男の子デモポンを育てることになる。デメテルは神から産まれた子供でもあるかのように、デモポンの肌にアンブロシアを擦り込み、甘い息をふきかけ、夜には彼を火の中に埋めた。ある日神かと思われるよ

うなデモポンの成長ぶりを不審に思ったデモポンの母は女神の養育シーンを覗き見、我が子が火の中に埋められるのを見て嘆きの声をあげる。その声を聴きつけたデメテルは怒り、女神としての姿を現す。女神は、不老不死の身にしようとしていたデモポンはもはや死を避ける術は無くなってしまった、しかし女神の腕の中で育てられたものとして決して朽ちない誉れを得られるであろうと告げ、アクロポリスの麓に神殿と祭壇を作り自分の伝える祭式を執り行うように命じた。

翌朝、母娘から話を聞いたケレオスは女神の言いつけどおり神殿と祭壇を作った。神殿が完成するとデメテルは神々のもとへは戻らず神殿にこもる。穀物の女神であるデメテルが隠れてしまったために大地は実りを失ってしまう。これに気がついたゼウスはデメテルを説得しようとするが、娘神に会うまではと聞き入れない。ゼウスはとうとうハデスを説得し、ペルセポネを母神のもとへと返す。ハデスはペルセポネがいつまでも母神のもとへとどまることが無いようにざくろの実を食べさせていたのだった。

そうしてペルセポネとデメテルは再会を果たす。ゼウスに遣わされたレアは、デメテルに望む限りの誉れを受けさせること、ペルセポネが一年を三つにわけたうちの一季は冥界での暮らしにあてられるものの、残りの二季は不死なる神々と共に暮らしてよいというゼウスの意向を伝え、デメテルはそれを受け入れ再び大地に実りをもたらす。そして、トリプトレモス、ディオクレス、エウモルポスとケレオスに祭儀の行い方を教え、トリプトレモスとポリュクセイノス、ディオクレスの一同に秘儀を明かすと、娘神とともにオリュンポスへと向かい、他の神々と共に暮らした（注4）。

以上が『デメテル讃歌』の概要でありエレウシスの秘儀式において一貫して語られる神話である。全てが女神の物語を語りながら、その趣旨は、デメテル信仰における、またはエレウシスの秘儀式における保証や祝福に向かっていると考えられる。

秘儀の要（かなめ）に独特な死生観を見出すBurkertやClintonの考え方は、この神話におけるコレーの運命になぞらえられたものである。その運命は穀物の女神デメテルの娘として穀物のサイクルを体現していると解釈される（注5）。コレーが冥界にとどまる一季は穀物の種子が大地に蒔かれ芽を出すまでの一季で、残りの二季を地上に芽を出してすくすくと育つ。秘儀を受けた者はこのサイクルと同じく、死

後冥界にとどまり続けること無く、また生まれてくることができるというのだ。

私はこの『デメテル讃歌』において、デモポンを養育するエピソードが秘儀式における奥義や祝福の要を語っていると考える。その点に関する考察に移りたい。ここで語られているのは人間の不死性と神性の否定、その上での現世における利益の肯定である。私はデモポンの運命は私たち人間の運命をほのめかしていると考えている。死は決して免れられない。しかしデモポンのように女神の心にかなうことで現世において女神の恵みを得られるのだ。ではその現世利益とは何か。それは『讃歌』の最後を締めくくる詩句に言及されている。

「いとも幸いなるかな、地上にある人間の身にしてかの二柱の女神が心から慈しみたもう者こそは。女神らはその者の大いなる館に、竈訪う客としてPlutosを遣わし、この神が死すべき身の人間たちに富をもたらすのだ」(四八六行目。注6)

Plutosとは富、特に穀物の富を表す神である。よって現世利益とは穀物であると考えられる。また本人ではなくその者の「館」に遣わされることからも、現世においての富であると確認できる。「女神の心にかなう」事については、後に引用する詩句の祝福の条件に祭儀が挙げられている事からもその条件はやはり秘儀への参加であると考え、よって秘儀において穀物の富という現世利益が保証されていると考えられる。

ところが『讃歌』にはまた、同じく「幸いなるかな」ではじまるもう一つの詩句があり、これも秘儀式における祝福を説明するものである。

「幸いなるかな、地上にある人間の身にしてこれを見し者は。密儀を明かされず、祭儀に与ることなき者は、死して後、暗く湿った闇の世界で、これと同じ運命を享けることはかなわぬ」(四八〇行目。注7)

こちらは、秘儀式を受けた者の死後の運命への言及であり、秘儀において確かに死後のよりよい運命が保証されていることを示している。これについては後に説明する。

## 第二章　エレウシスの秘儀

前章ではエレウシスの秘儀の核となり基盤となる『デメテル讃歌』について見てきた。次はいよいよエレウシスの秘儀そのものについて考察する。儀式はBoedoromion(三月＝現在の九月)に行われた(注8)。以下はBurkert

の *Greek Religion* を参照してまとめた秘儀の行事の概略である（注9）。

Boedromion の一四日は祝祭の前の日、Epheboi（若者たち）によって聖なる物がアテネのエレウシニオンからエレウシスまで運ばれる。そして司祭の宣言で祭礼期間が幕開けとなる。一六日、加入儀礼の参加者は Phaleron の入り江で子豚と沐浴する。そして一八日、彼らは家で断食を始める。一九日、聖なる道に沿ってエレウシスへの三〇キロの道のりを行進し、巫女が持つ kistai（kiste、箱の複数形）に入った聖なる物に付き添う。行列の途中、エレウシス近くの Cephisos 川でグロテスクな道化芝居が行われ、秘儀の参加者たちは卑猥なあざけりを受ける。二〇日夜、星が出ると参加者たちはそれを合図に断食を解く。行列はエレウシスに到着、そして本格的な秘儀の儀礼が行われる。まずは一緒に沐浴した豚を自分の身代わりに殺す。次いで清めの儀式がある。そして、暗闇が広がり入信者を包む。Anaktron（アナクトロン）が開き、祭司が現れ光が彼らを包むまで恐ろしいものが見せられると考えられている。そして二一日、秘儀をとりまいて様々な祝祭が行われる。

Burkert が述べているように、秘儀式についての様々なほのめかしは整理しきれない。Burkert と Kevin Clinton では秘儀式の日程やそこで行われる行事とその解釈も大分違うが、上記の日程概略にはより客観的に秘儀式を解釈していると思われる Burkert のものを引用した。「幸いなるかな、地上にある人間の身にしてこれを見し者は」（注10）と『讃歌』で述べられているように、秘儀式における要は「見ること」にある。両者とも彼らのテキストの中で、諸行事を経験することが重要なのだと語る（注11）。

Burkert が述べる秘儀の祝福の方法は秘儀で伝えられたものについて直接にほのめかす大切な材料である。その祝福の方法とは、

1：mystes は司祭によって地下から呼び出されるコレーを見る

2：司祭は神の誕生を告げる。「女神は聖なる御子をお産みになった。Brimo（畏怖すべき女神）が Brimos（畏怖すべき御子）をお産みになった」

3：司祭は静寂の中刈り取られた麦の穂を提示する

というものである（注12）。1について、コレーが現れるのは神話における女神の顕現だと考えられる。2については、解釈の鍵はその女神は誰で、御子は誰であるかということになる。Burkert は女神デメテルとその御子 Plutos

か、女神ペルセポネとその御子イアッコス・ディオニュソスであるという二つの可能性を挙げている（注13）。神話の中で母の役割として登場するのはデメテルの方で、コレーは娘としての登場であることから私は前者の意見を解釈として取り入れる。するとPlutosは富の神、特に穀物の富の神であるので、デメテルが秘儀の入信者に穀物の富をもたらしたということが表されているのだと解釈できる。そして三つめ、司祭の穀物の穂の刈り取りについて、これはデメテルが産んだPlutosであると考えられる。Burkertは穀物の穂は祭司のかまによって刈り取られ、その生命、成長や繁栄はいったん停止されるがそこにはまた新しい生命が宿るのだと解釈し、死後のよりよい運命への解釈につなげ（注14）、更に穀物の穂の刈り取りに去勢を連想している（注15）。

## 第三章　テスモフォリア祭

最後に秘儀と同じくデメテルを主神とするテスモフォリア祭について見てみよう。豊穣と多産を願い、女性のみが参加するその祝祭は古くから行われ、ギリシャ中に広く伝えられていた。この祭儀は秘儀ではないが、その内容を語る事は許されなかったため詳細は知られない。開催時期や祭礼期間は土地によって異るが、以下の日程はアテナイで行われたテスモフォリア祭の概略である。

初日（anodos：お登り）、女性たちは儀式の道具や滞在の準備の道具、そして犠牲の子豚を持ってテスモフォリオンへと行進し、子豚をデメテルとコレーの裂け目に投げ入れる。中日（nesteia：断食）、女神と共に隠れてとどまる。性欲を抑制する作用があるとされる植物の小枝で大地に寝床を作る。終日（kalligeneia：満願の日）、断食は犠牲と偉大な祝宴に達して終わる。アテナイではこの日に美しい生まれの女神カリゲネイアが呼ばれる（注16）。

テスモフォリア祭の諸儀式もエレウシスの秘儀式のように諸行事はデメテルとコレーの神話によって縁起を語られ、神話をなぞっている。初日のテスモフォリオンへの行進はコレーを探して彷徨うデメテルに、中日の断食の陰鬱なムードはコレーを奪われて悲しむデメテルのムードに調和する。そしてデメテルとコレーの裂け目に豚が投げ込まれる行事は、『デメテル讃歌』でコレーと共に豚飼いエウブレウスとその豚が大地に沈んでいったエピソードに重なり、卑猥な言葉をかけあう行事はイアンベーのエピソードに重なる（注17）。

Burkertはこの儀式では二つの側面が強調されていると説明する（注18）。一つはわいせつの側面（注19）。女性たちはみだらなお喋り（アイスクロロギアー）にふけった。後の資料によると、女性たちは女性の外陰部を崇拝していたという。中日には断食をし、性欲を抑える作用があるとされる小枝で地面に寝床を作るという「わいせつ」とはまるで正反対のことが行われた。そしてもう一つは血の側面（注20）。この儀式では男性が厳しく排除された。BurkertはBatto王、Aristomones、「テスモフォリア祭は殺人者として名高いダナイ人によってエジプトからギリシャにもたらされた」というHerodotusの断言（『歴史』第二巻一七一節）を例に挙げる。アリストパネス作『女だけの祭り』でもこの祭儀で男性を厳しく排除する女性の姿がうかがえる。更に血の側面として女性たちは地面に落ちたざくろを食べることを禁忌としていた。ザクロは死者との結びつきが強く、墓に植えられたり死者の副葬品とされる一方で豊穣や結婚の象徴でもある（注21）。

祭儀ではこの二つの側面によって豊穣と多産が祈願される。わいせつの側面はもちろん、血の側面についても女性の出産の準備であり、多産への祈願につながる。私は中日に行われるわいせつとは正反対の準備が一つの祈願へと向かっている点に注目したい。繁殖の中止が更なる繁殖へと続き、死の象徴が同時に出産や生の象徴であるというように、正反対の事柄のように感じられる生と死は互いに背中合わせに位置し、同じ豊穣と多産の祈願へと向かっているのだ。

Burkertは祝賀の中心にあるものを家族の解体、性の分離、女性のコミュニティの構築であるとする。男性を厳しく排除し能動的な女性達は年に一回、自分たちを縛る日常から離れて女性の独立した社会を構築し、女性の役割である農業の繁栄と多産を祈るというのだ（注22）。

デメテルを主神とする両祭儀を比較してみると、まずは、テスモフォリア祭にはエレウシスの秘儀式において言及されるような死後のより良い運命への言及は見られない。そこにはあくまでも今生における豊穣や多産、女性たちの日常からの解放があるのである。次に、秘儀式でもテスモフォリア祭でも今生における祈願がはっきりと見られるが、それは明らかに違った面からの祈願である。テスモフォリア祭はコミュニティが豊かになり、更に後世へと続いていくための豊穣と多産を祈願し、エレウシスの秘儀式では個人が更に富を得てより豊かな暮らしを送るための「穀物の利益」が祈願されていると私は考える。

秘儀式と同じくデメテルを主神とする女性だけの祭儀は、個人で現世利益、即ち富を求めるエレウシスの秘儀よりも切実なコミュニティとしての豊かさへの祈願がなされ、その祭儀には一旦の停止、正反対の準備が後に更なる活動を呼び、生と死とは両端にある事柄なのではなく、すぐ背中合わせに位置するのだという思想が見受けられた。

## 終　章

以上、エレウシスの秘儀式について知る手がかりを見てきた。そこで最後に、秘儀における祝福や保証とは一体何なのだろうか、という疑問についての考察をもって終章としたい。

まず『デメテル讃歌』や秘儀式についての文献から読み取れる事柄ははっきりとした現世利益への言及である。曖昧なほのめかしのみの説明の中でそれだけは明言されているので、秘儀式とは現世における利益や富のみを保証される祭儀であるとも考えられなくはない。神話をなぞる諸行事は女神の心にかなうための壮大な神話の上演であり、入信者は女神の娘コレーとの再会の喜びへと向かうその神話を演じて女神を祀り、富を願ったのだと。

秘儀における現世利益への祈願は以上の通り一見して明らかである。しかしそれだけではこの秘儀式は説明がつかない点も多々ある。秘儀式は「見ること」、「経験すること」が重要であると述べられていることは前にも述べた。穀物の富を得るための壮大な神話の上演だけならそれらには決して重きは置かれないのではないか。儀式が穀物の富を得るための神話の上演であれば、その諸行事はもっと単純明快でこんなに複雑に入り組むことはなかったのではないか。そして、一〇〇〇年もの長い間多くの人の間で、その内容を伝えてはならないという儀式の決まりが厳密に守られるということはなかったのではないかと考えられるからである。

何故、秘密は秘密のまま厳密に保持されてきたのであろうか。違反すれば死罪だったという重い処罰のせいかもしれない。「その密議（秘儀）は怖れ畏むべきもので、これを侵すことも、それについて問うことも漏らすことも許されない。神々に対する大いなる虔みゆえに、声に出すこともできないのである（注23）」という『讃歌』の詩句の通りあまりの畏れ多さに口に出すこともできなかったのかもしれない。しかし私は、その「秘密」が語りようのないものだったからだと考える。神への畏れ、死罪への恐れのみで

は一〇〇〇年もの長い間秘密が厳密に守られるということはなかったのではないかと思うのだ。現世利益が厳密に守られた秘密であるとも考えにくい。現世利益については誰もが共通して望み、明確に語ることができる故に、あちこちに明確な言及がなされていたのではないだろうか。秘儀式は誰もが望む現世利益と、受け取った者も言葉にできない「秘密」を保証される儀式なのである。では、その秘儀において保証された「秘密」とは何であろうか。

また私は、そのエレウシスの秘儀式におけるその死生観が、輪廻転生の運命の保証であるとは考えない。そこに穀物のサイクルに見る死や全ての終わりではないという思想が盛り込まれていたとしても、それが明確な参加者への輪廻転生への保証だとは思えないのである。理由は三つある。まず、前述のように簡単に語れるような秘密ならどこかで確実に暴かれていたのではないかということ。次に、何度も述べるように『デメテル讃歌』の中のデモポンのエピソードに人間と神とのはっきりとした線引きを感じ、このことからたとえコレーの穀物のサイクルであっても人間がそれを体現するのは不可能だったと考えられること。そして最後に、秘儀を受けたならその者にとって死は全ての終わりではないと保証されるが、たとえそれを信じたとしても、やはり死の恐怖は薄れなかったのではないかということからだ。当時の人々は迫り来る死を前に、来世への生まれ変わりを期待して安らかな気持ちになれただろうか。どんなに輪廻転生を解き明かされてもやはり死は恐ろしく、全ての終わりのように感じられたのではないか。そしてまた次の生においてもやがて死の恐怖を味わう。それはそのような恐怖をすべて解消し得る有り難い思想だったのだろうか。私にはそうは思えないのである。

私はこの疑問を解決する鍵を、秘儀式における祝福に見出す。秘儀式では暗闇の中で女神が顕現し、Plutosの誕生が告げられ、刈り取られた穀物の穂が提示される。私はPlutosの誕生、そして刈り取られた穀物の穂の提示に注目する。穀物の富の神であるPlutosの誕生は穀物の穂の刈り取りによって成立する。刈り取られた穂は植物としての生を止められ死に至るが、それは人間の命の糧となり、命へとなっていく。また植物の生命としても、刈り取られ停止された生命はその穂が大地に蒔かれる事で更なる生命をもたらされる。死は全ての終わりではなく、いったんの生命、成長、繁栄の停止が更に充実したそれをもたらすのだ。このことが女神の顕現のもとで示されるのだと私は考える。暗闇の中で動物が焼き殺され、死や暗闇の恐怖にお

ののく参加者たち。そしてまばゆい光と共に女神が顕現し、刈り取られた穀物の穂が示される中で、彼らは恐れていた死は全ての終わりではなく更に充実した生へとつながることを体験するのだ。これは性欲を抑える寝床を作り後の多産に備え、死との結びつき、同時に多産と繁殖の象徴である血が祭儀の中心に位置するテスモフォリア祭にも見受けられる。

生は死へとつながり、活動はやがて停止することは普段の生活や色々な事柄から誰もが悟っているであろう。しかし、死は生へ、停止は更なる活動へというその逆転の発想は普段の生活からは恐らく見出せない。祭りという神に相対する非日常においてそれが伝えられ、理解されたのであろうと思われる。秘儀式は神を目の前に日常の中で理解するのは難しいこの思想を伝えるものだったのだ。それは直接に死の恐怖を弱めない点では秘儀の祝福を輪廻転生に見出す見方と変わらない。死は目の当たりにすればやはり恐ろしい。しかしその思想は言葉で表せるどんなものよりも彼らの中に沁みこんだのではあるまいか。祝福を受けた者が得たのは、まさに生と死の逆転の「視点」だったのである。

## おわりに

以上が私にとってのエレウシスの秘儀であった。秘儀において明確なことは何一つ知られていない。確かな知識など無に等しい私にとっての秘儀式の解釈はその最たるもので、その考察も秘儀はこのようなものであるとよい、というようなものである。私は秘儀に生と死についての思想を見出した。それはどんな時代の誰にとっても全ての根本に触れる重大な思想ではないのかと思う。少なくとも私にはとても重大だと感じられる。古代の祭儀は今現在に伝わる様々な事柄のルーツである。そしてそこには全ての根本となる思想が存在し、それはやはり今の自分の根本であると感じ、長い時の隔たりがあってもやはりつながっているのだと感じるのである。

### 〔注〕

(1) W. Burkert, *Greek Religion*, tr. by John Raffan, Harvard University Press, Cambredge, Massachusetts, 1985（原著ドイツ語版、一九七七年）、p. 285.1.19

(2) Kevin Clinton, "The sanctuary of Kore and Demeter at Elensis", in *Greek Sanctuaries—New approaches*—, ed by Nanno Marinatos and Robin Hagg, Routledge, London and New York, 1997, pp. 110-l.7.
(3) 沓掛良彦『ホメーロスの諸神讃歌』、平凡社、1990, p. 90.l.10
(4) 沓掛良彦、前掲書　逸身喜一郎・片山英男訳『四つのギリシア神話』、岩波書店、一九八五（一九九二）の『デメテル讃歌』本文から要約。
(5) 沓掛良彦、前掲書 p. 66-07；逸身喜一郎・片山英男訳、前掲書 pp. 235.l.9
(6) 沓掛良彦、前掲書 p. 34『讃歌』四八六-四九〇行目
(7) 沓掛良彦、前掲書 p. 34『讃歌』四八〇-四八三行目
(8) W. Burkert, 前掲書 pp. 286.l.38
(9) W. Burkert, 前掲書 p. 286.l.7～p. 289.l.6 から要約
(10) 注7に同じ
(11) W. Burkert, 前掲書 p. 286.l.33　Kevin Clinton、前掲書 p. 119.l.36
(12) W. Burkert, 前掲書 p. 288.l.28
(13) W. Burkert, 前掲書 p. 288.l.33
(14) W. Burkert, 前掲書 p. 288.l.41
(15) W. Burkert, 前掲書 p. 288.l.39
(16) W. Burkert, 前掲書 p. 242.l.29　Kevin Clinton、前掲書 p. 114.l.15 アリストパネース作、前掲書 p. 146.l.11
(17) Kevin Clinton, 前掲書 p. 114.l.27
(18) W. Burkert, 前掲書 p. 244.l.7
(19) 以下の文章は W. Burkert, 前掲書 p. 244.l.7～p. 244.l.40 から要約
(20) 以下の文章は W. Burkert, 前掲書 p. 244.l.27～p. 244.l.61 から要約
(21) 沓掛良彦、前掲書 p. 63.l.9
(22) W. Burkert, 前掲書 p. 245.l.19
(23) 沓掛良彦、前掲書 p. 34,『讃歌』四七八行目

**参考文献：**

テキスト及び注釈

W. Burkert, *Greek Religion*, tr. by John Raffan,

Harvard University Press, Cambredge, Massachusetts, 1985（原著ドイツ語版、一九七七年）.

Kevin Clinton, "The sanctuary of Kore and Demeter at Elensis", in *Greek Sanctuaries—New approaches—*, ed by Nanno Marinatos and Robin Hagg, Routledge, London and New York, 一九九七。

沓掛良彦『ホメーロスの諸神讃歌』、平凡社、一九九〇

逸身喜一郎・片山英男訳『四つのギリシア神話』、岩波書店、一九八五（一九九二）

## その他の参考文献

アリストパネース著、呉茂一訳『女だけの祭り』、岩波書店、一九七五

本論文は平成一三年度学習院大学文学部哲学科卒業論文に補筆修正を加えたものである。